

## 7 県内で伝承される話の背景（語りの形式、語り手等）

### (1) 語りの形式

昔話は、その性格から語りの形式を重視します。

語りの形式とは、具体的には、語り始め、語り納めなどのことです。

#### ア 語り始め

佐賀における昔話の語り始めは、一般的に、「むかし、むかし」とされています。中には、「むかし、むかし、うー（大）むかし」、「くー（大）むかし」等強調した表現もみられますが、一般化はしていません。

ただ、現実には、蒲原タツエさんのような本格的な語り手でさえも、語り始めを付けないことが多いことからみると、必ずしも付ける必要はなかったし、付けなくても昔話は語る事が許されたようです。

#### イ 語り納め

佐賀における昔話の語り納めは、一般的に、「そいばっきゃ」とされていますが、細かく見ると、地域により、あるいは語り手により、次のような違いが見られます。

#### ○ 違い1（県内での違い）

県北部の唐津市周辺部や県東部の鳥栖市田代地区・基山町一帯では、「そいばっかり」、「そりばっかり」などと、語尾が微妙に変化しているものがあります。

これは、両地区が、江戸時代、鍋島藩ではなく、他藩に属していた影響と言われ、同じ佐賀弁でも方言が微妙に異なるからです。

ちなみに、県北部は、徳川の譜代大名が治める唐津藩で同じ佐賀方言でも唐津方言として区別します。また、県東部の鳥栖市田代地区・基山町一帯は対馬藩（宗氏）の所領で、田代方言として区別します。

#### ○ 違い2（「そいばっきゃ」と「そいまっきゃ」）

「そいばっきゃ」を使う鍋島藩の領域内でも、微妙な変化があります。小城市以西では、「そいばっきゃ」と同様に、「そいまっきゃ」もよく使われます。

これは、「そいまっきゃ」が「そいばっきゃ」よりも発音しやすいことから変化したのではないかとされています。

なお、嬉野市には、1話だけですが、「昔むくれて、今まあっきゃあ」とする語り納めも確認されています。

#### ○ 違い3（「ちゃん、ちゃん」という語り納め）

もうひとつ、「ちゃん、ちゃん」という語り納めがあります。特に、佐賀の本格的な語り手の一人の松尾テイさんの語りの中に頻繁に出てきます。本シリーズで取り上げた11話のうち10話に「ちゃん、ちゃん」の語り納めが付いています。具体的には、「これでおしまい、ちゃん、ちゃん」という風に語られているようです。

不思議なことに、この語り納めは、もう一人の佐賀の本格的な語り手、蒲原タツエさんの話の中にもでてきます。ほとんどは「そいばっきゃ」ですが、本シリーズで取り上げた15話のうち1話が「ちゃん、ちゃん」で終わる話です。蒲原さんが語った843話のなかには、もっとたくさん「ちゃん、ちゃん」で

終わる話があります。

さらに不思議なのは、この「ちゃん、ちゃん」という語り納めをする語り手は、県内ではお二人だけだということです。

では、お二人のこの「ちゃん、ちゃん」という語り納めはどこから来たのか。

松尾さんの話にはほとんど出てくるので、松尾さんが昔話を聞いた前傳承者が使っていた語り納めと考えられます。蒲原さんによると、「ちゃん、ちゃん」が付く話は叔母さんにあたる人から聞いたとのことなので、その叔母さんと松尾さんの前傳承者はどこか繋がるのかなど、謎は深まるばかりです。

## ウ その他

語りには、そろそろ語りを終わりにする際に話される話があります。広義では語りの形式の一つに含まれますので、ここで2話紹介します。

ともに、子供に話をせがんで寝ようとしないうちなどに、語りを終わらせるためにする話です。

### 「葉のない大根」(原話のまま)

百姓さんが大根ばつくりましげな。

そうしたげなりゃあ、そん大根が、ドンドンドンドン大きゅうなって、もう、見たこともなかごと大きな大根になりましたげなけん、

「こりゃあ、もう珍しかけん、お殿さんに上ぎゅう」ちゅうて、大八車に乗せて、お城に持って行きましたげな。

そうしたげな、あんまい大きかけんて、門から入りませんげなけん、「葉ば切ったなら入ろう」ちゅうて、葉ばきりましたげな。

そうしたら、そいが、本当に、は・な・しになつたげなちゅうて。

～基山の民話(昭和61年、佐賀民話の会編集・発行)より～

### 「長一んか話(天からふんどし)」(原話のまま)

あたいのお母さんなさい、朝早う起きてお茶がゆば炊きなんもんじゃさい、お父さんのあたいば寝せようて、「もう寝一らんば、長(な)一んか話ばきかすつよ」ちゅうてね、「ないねー」ちゅうたぎ、「天から禪(へこ)ふったった」ちゅうて言われよった。

～未刊資料(東与賀町)、筆者聞き起こし～

## (2) 語り手

佐賀の昔話の語り手と言え、まず、843話の昔話を語った塩田町の蒲原タツエさんと、同じく300話近くの昔話の傳承者である伊万里市立花町の松尾テイさんを紹介しないわけにはいきません。

実は、このお二人には、ある共通点がみられます。

まず、生年月日が1カ月と違わないのです。蒲原さんが大正5年4月13日生まれに対し、松尾さんは同じく大正5年3月29日生まれです。

さらに、蒲原さんの嫁ぎ先である塩田町(現嬉野市塩田町)は、松尾さんの嫁ぐ前の郷里(出生地)なの

です。

また、蒲原さんの実家かというと、塩田川を暫く下った目と鼻の先の旧有明町(現白石町)です。そして、この地も塩田町も杵島山麓の南の端に当たり、距離的にはそれ程離れていません。

こうした共通点は、偶然の一致だろうと思いますが、何か不思議なものを感じます。そして、先程の語りの形式のところで触れた、蒲原さんと松尾さんだけにしかみられない語り納め「チャン、チャン」の一致は、塩田町あたりで謎の解明の糸口が見えてくるような気がしています。

### (3) 語りの場所

語り手が親や祖父母で、聞き手が子供や孫の場合、昔話が語られた場所は、佐賀県も他県と同じく寝床や囲炉裏端などが主な場所ですが、実際には、もっと色々な場所で語られていたようです。

語りの場所が話の名前になった例を、2つ紹介します。

#### ア 絵描き座話

佐賀県の伝統産業である有田焼が作られる過程のうち、絵付けの場で話されていた話のことです。

本シリーズでは、「絵描き座話(一杯飲まんば話されん)」(No. 12)をとりあげました。

この話は頓智話ですが、大半が笑い話で、その中でも、色話が多かったようです。語り手によると、絵付けの場には女性もいたことから、女性を冷やかす目的もあったということです。

#### イ 柿むき話

佐賀市大和町の松梅地区において、柿の皮をむく作業の場で話されていた話です。

大和町の松梅地区では、毎年暮れになると、田の中の稲小積や家の軒先に正月用の干し柿が沢山吊るされている風情をよく見かけます。

この柿の皮をむく作業は、以前は家族総出で、夜なべ仕事でやっていたということです。具体的には、家の土間にござを敷き、ござの中央に置いた柿の山の周りに、家族や近隣の親族まで集まって、夜中まで柿むき作業をやっていたそうです。

夕食後の時間ですし、昼間の仕事疲れなどもあり、皆眠くなるわけですが、その眠気を防ぐために昔話が話されていたと思われます。

このため、話のうまい語り手は重宝がられて、方々から呼ばれることも多かったそうで、こうした語り手は、話を沢山仕入れるため、他の地域まで話を聞きに出かけたり、旅の座頭などがやってくると、泊まっている宿に自ら話を聞きに行っていたとのこと。

本シリーズでは、「にわか侍」(No. 68)を取り上げましたが、この他にも次のような、話があります。

「ヤンボシ(山伏)さんとヤコ(野狐)」(原話のまま)

むかあし、ヤンボシさんがそま(蕎麦)畑を通いよんさったぎ、ヤコがそこに昼寝をしとったそうです。

そいけん、ヤンボシさんが、いっちょ(ひとつ)びっくいさせてやろうで思うて、ヤコの耳に法螺貝を持っていて、一生懸命、ひどう鳴りやあたそうです。

そいぎと、ヤコがびっくいして、ケンケンケンで逃げていったて。

そいぎ、そんな時あ、ヤンボシさんが勝ったばってんが、次にまた、その田舎道を通いよったところが、日の暮れ方になって、前から葬式の行列の来よったて。

そいぎ、「こりゃあ、葬式の通っ。縁起の悪か」て言うて、木の上い登って通い過ぎつとば待つとらしたわけ。

ところが、その葬式がこともあろうに、ヤンボシさんの登つとらすとこ(所)の木やしちやあ(下)棺桶ば埋めたからですね、葬式の行列の帰った後で、棺桶ん中から、生焼けした死体が出てきて、木の登ってきたて。

そいぎ、ヤンボシさんな、もうどかんしゅうもなし(どうしようもなく)、ちょうど反対側が川じやったから、「英彦山権現さんのおいとまごい」ちゅうて、その木の上から川に飛び降りたて。

そいぎ、川ん中て思つとつたら、そこは蕎麦畑じやったて。

そいで、ばあつきや

～未刊資料、筆者聞き起こし～

話の種類は、眠気覚ましが目的なので、本シリーズのNo. 68 やこの話のように、面白い話や怖い話が多かったそうです。

このほか、作業の場で昔話が語られていた例としては、その技術が県の重要無形文化財に指定されている名尾和紙(佐賀市大和町)の紙漉きの場で話を聞いたとか、素麺づくりの麺を伸ばす作業の場(佐賀市諸富町)で話を聞いたとするものもあり、地域や語り手等に応じて、色々な語りの場があったようです。